

ひきこもりピア・サポーターによる手紙を活用した訪問支援に関する実践研究

—見返りを求めず片思いにゆるやかにつながる試みとして—

NPO 法人レター・ポスト・フレンド相談ネットワーク 田中 敦 (No.2891)

E-mail info@letter-post.com URL http://letter-post.com/

キーワード：ひきこもりピア・サポーター 手紙 訪問支援

1. 研究目的

平成 25 年度より厚生労働省は「ひきこもり対策推進事業の拡充」として「ひきこもりサポーター養成研修・派遣事業」を実施している。本事業は平成 21 年度から整備されてきた「ひきこもり地域支援センター」が中核となりひきこもりサポーターの養成研修を実施し、修了登録者を必要とされる家庭に関係機関と連携を図りながら具体的に派遣されることになっている。さらに厚生労働省が示す「ひきこもりサポーター」の役割には①地域に潜在するひきこもりの発見（市町村への相談）②訪問支援③ひきこもり地域支援センター等の専門機関への紹介等④普及啓発（勉強会等の開催）が掲げられているが、このうち特に強調されているのは②訪問支援である。しかし現実是在宅状態にあるひきこもり当事者に対して全く面識のない実践者が家庭訪問し接触することは容易なことではなく、具体的な実践に直結することが難しい課題が残っている。

そこで本研究では平成 27 年度公益財団法人日本社会福祉弘済会社会福祉助成金【C. 実践研究】採択のもと、ひきこもり当事者で組織する当 NPO が中心となって「手紙 (letter)」に着目した研究に取り組み、手紙による方法論を広義の訪問支援と位置づけて、これを活用した効果的な訪問支援のあり方を研究することを目的に実施した。

2. 研究の視点および方法

本研究では対人不安が強いひきこもり当事者と心身ともに無理なく「出会うきっかけ」として、また「有意義な仲間 (peer)」として誘い掛け、彼らと「対等な立場 (partnership)」に立つことが可能なひきこもり当事者（以下、ピア・サポーター）が手紙というツールを有効活用して活動していく意義は大きいと仮定し、手紙の中でも特に絵葉書 (postcard) を方法として採用した。ひきこもりの場合、本人から承諾を得るのは難しいと家族が導入を躊躇することが多いため、手紙が届くかもしれないと本人に伝える最小限の同意を得ること。また絵葉書を出すタイミングも少なすぎても疎外感を与え、逆に多すぎても圧迫感を与える可能性も考えられるため原則週 1 回ペースの頻度で、①守秘義務②個人差出名で送る③返信を求めない④学校や仕事のことは触れない⑤絵葉書や切手には工夫を凝らす⑥相手の興味関心事を重視する⑦メッセージは短信につとめる⑧情報を提供する⑨旅先などから送る⑩担当者を無断で変更しないことを留意点としながら実践した。

3. 倫理的配慮

一般社団法人日本社会福祉学会研究倫理指針に従う。特に本研究では第2指針内容Cに関係して本人や家族の了解のもと特定の地域や個人が特定されないよう配慮して行なった。

4. 研究結果

本研究の結果について郵送質問紙調査法によってその効果測定を行なった。今回公募により対象となった56人のうち有効回答者は44人(回答率79%)であった。「性別」では「男性(25人・56.8%)」「女性(19人・43.2%)」「年齢別」では「30代(16人・36.4%)」がもっとも多く、「所属別」では「無職(28人・63.6%)」が全体の半数以上を占め、一日の大半を「一人であることが多くほとんど交友関係はない(17人・38.6%)」状況で「その他(8人・18.2%)」では友人関係はまったくないと回答する当事者も少なくなかった。「地域別」では「札幌市(16人・36.4%)」に対して札幌市以外の「その他(28人・63.6%)」が全体の半数以上を示し地方圏の活用が目立った。絵葉書受取後の印象では「予想以上によかった(8人・18.2%)」「それなりによかった(11人・25.0%)」を合わせると全体の約4割を占め、その理由(FA)では「学校と家庭しか知らなかった当事者にとって新しい世界とつながった思いだった」など外とのつながりができたことに対する肯定的な意見がみられ、さらに受け取った絵葉書を「父親又は母親とだけ共有した(8人・18.2%)」「両親と共有した(4人・9.1%)」「親しい友人と共有した(2人・4.5%)」という回答が約3割あった。絵葉書を受け取ってみて「よかった点」については「コメントがよかった(24人・54.5%)」がもっとも多く、次いで「イラストがよかった(18人・40.9%)」「写真がよかった(10人・22.7%)」「切手がよかった(8人・18.2%)」が続いた。今後絵葉書による訪問支援をさらに発展させていくためにはどのような工夫が必要かについては「受け取る当事者のニーズ(要求)の把握(15名34.1%)」への期待がもっとも多かった。しかしこうした評価がある一方では、実践上の課題も残された。絵葉書を受け取る心構えとして家族から事前に当事者への説明があったかについては「不明(19人・43.2%)」がもっとも多く「事前説明はあった(6人・13.6%)」と回答した当事者は全体の1割程度に留まった。

5. 考察

返信を求めない実践であったにもかかわらず少数ながらも「自分の意思で返信した(7人・15.9%)」当事者があったことはささやかな成果であったが、多くの当事者自らが「とりあえず受けてみるころからはじめようと思った」と語るように「返信はできないが絵葉書を受け止めることは大丈夫」とするひきこもり当事者の心のありようを理解し、当事者一人ひとりの思いを汲み取っていく丁寧な対話が求められる。毎回届く絵葉書がただ単に「本人の目の届く階段」やその場に「置かれたまま」にならないよう、家族が絵葉書を媒介にして家庭内での声掛けや世間話を促進していく契機としていかにつないでいくかが大きなポイントとなる。また実践していくうえで突き当たる「相手の状況・背景が見えにくく不安がある」という手紙(絵葉書)がもっている特有の課題を視野に入れたスーパービジョンや研修プログラムの開発を検討することも今後の課題といえよう。